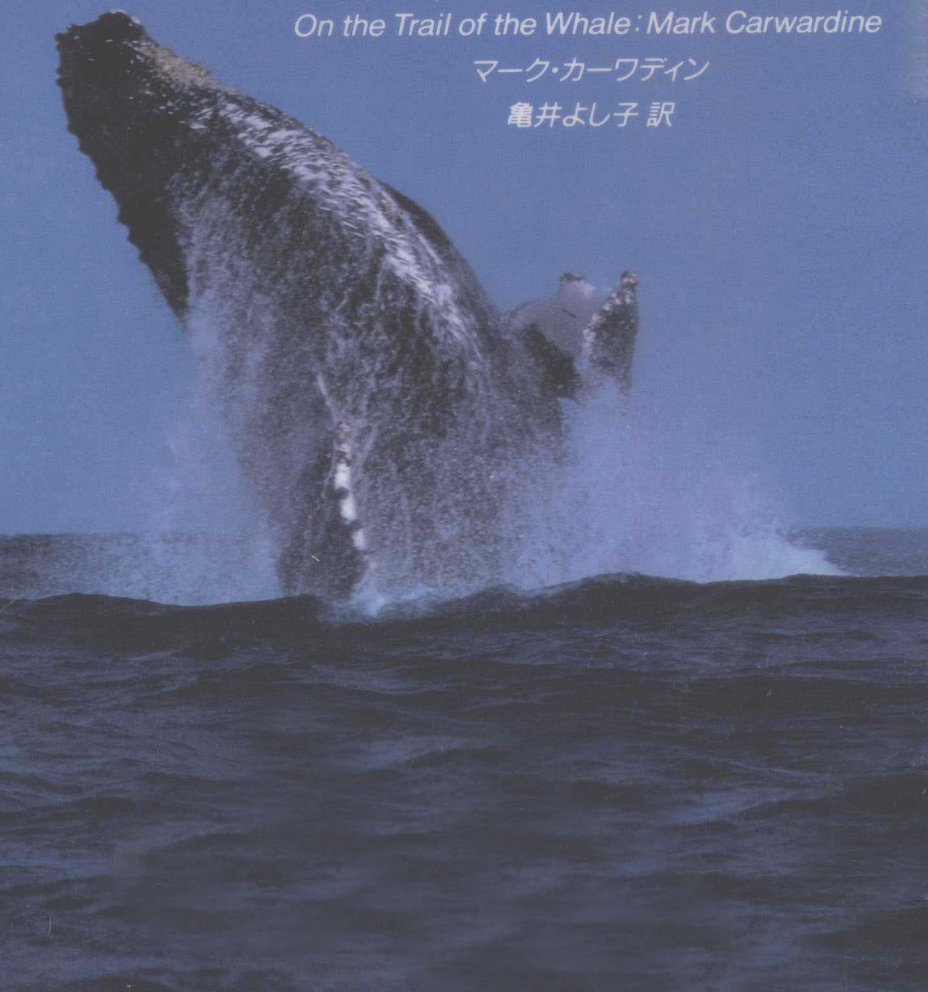


波間に踊る クジラを 追って

On the Trail of the Whale: Mark Carwardine

マーク・カーワードイン

亀井よし子 訳



波間に踊る クジラを

通王学院図書館

On the Trail of the Whale: Mark Carwardine

マーク・カーワードイン

蔵書章

亀井よし子訳

草思社

波間に踊るクジラを追って

1997© Soshisha



訳者との申し合わせにより検印廃止

1997年7月25日 第1刷発行

著 者 マーク・カーワディン

訳 者 亀井よし子

装丁者 坪内祝義

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草思社

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26

電 話 営業03(3470)6565 編集03(3470)6566

振 替 00170-9-23552

印 刷 錦明印刷株式会社

カバー 株式会社大竹美術

製 本 加藤製本株式会社

ISBN 4-7942-0760-3

Printed in Japan

波間に踊るクジラを追って◎目次

はじめに 5

1 海底峡谷を越えて 11

マッコウクジラの深海ダイビング／ニュージールランド

2 戦禍の島のクジラたち 44

姿を現した巨体、シロナガスクジラ／スリランカ

3 陽に映えるパドル 64

コククジラといくカヤックの旅／メキシコ

4 捕鯨からウオッチングへ 87

ニタリクジラと元クジラ漁師たち／日本

5 シュノーケル・パーティー 105

ゴンドウクジラと泳ぐ／カナリア諸島

6 オルカの海 123

親愛の情をみせるシャチ／カナダ

7 陽気な巨鯨 137

東海岸のザトウクジラ／アメリカ

8 ミンク・パトロール 166

スコットランドのミンククジラ研究／イギリス

9 水中の歌い手たち 185

歌うザトウクジラ／ハワイ

10 クジラの通る道 201

ホテルの窓からながめるセミンクジラの潮吹き／南アフリカ

ホエール・ウォッチングのためのガイドライン

221

訳者あとがき 224

口絵・本文デザイン
井上亀夫

はじめに

これは鯨を求めて世界中を旅した一年についての物語である。もしこの物語から何か学ぶものがあるとすれば、それは一年という時間を過ごすにはこれほどすてきな過ごし方はない、何かを探すとすればクジラほど素晴らしいものはない、ということにつきるだろう。

クジラには見る者の襟首をつかんで、朝も昼も夜も彼らのことを考えずにはいられなくさせるような、何か不思議な魅力がある。芝居じみた言い方になるのを覚悟でいわせてもらえるなら、クジラはすばらしいバイブレーションを伝えてくれる。彼らは神秘的で謎めいたオーラを発していて、それに接すると、思わず気分がよくなってしまう。

体重三〇トンになんなんとするザトウクジラが宙に舞い上がったときのことを、マッコウクジラが船の下はるかの暗黒の海にダイビングしたときのことを、私はけっして忘れないだろう。耳を澄ませば、いまでもあのシャチの家族の生き生きとした会話が聞こえてくるような気がするし、好奇心満々のゴンドウクジラの群れと泳いだときのことを夢に見る。そうした彼らとの間近での

出会い——それは生涯忘れえぬ出会いといってよいだろう。

ほんのつかのまクジラとたわむれただけで、いつもは冷静でものに動じることのない人物が、たちまち興奮してうわごとのようにその喜びを話しはじめる。ホエール・ウォッチングのときには、ほとんどどんな人でもパーティの中心人物に変身する。現にこの私も、いい年をした大人がデッキの上を踊りまわったり、いきなり歌をうたいだしたり、かと思えば涙を流したり、互いに背中を叩きあつたりと、もの静かで落ち着きはらった人ならしないとされてゐるありとあらゆることをするのを何度も目の当たりにしてきた。むろん、この私も同じことをしてきた。

しばらくすると、人々の興奮とおしゃべりは鎮まる。しかし、彼らは依然としてけつして消えることのない心地よさに包まれているはずだ。いったんクジラを目にすると、そこにクジラがいる、彼らが大海原を自由に泳ぎまわっているのを知っている、というただそれだけのことに、途方もなく大きな、そしていつになっても消えることのない満足感に包まれる。

正直にいう。ホエール・ウォッチングには中毒性がある。それはあなたに忍び寄り、すべてを焼きつくす。そして、その情熱は一生消えることがない。私はもう何百回もホエール・ウォッチングを経験しているが、海に出るたびに、いまだに初めてのときと同じあの胸のざわめきを抑えることができない。クジラを見ると、たちまちハイになり、浮遊感にとらわれる。べつの惑星にいろような気分に襲われる。この地上に戻り、いや、少なくともイギリスに戻り、灰色の月曜の朝を濡らす雨を見つめているときでも、過去に目を向けさえすれば……そう、クジラのことを思い出しさえすれば、ことは足る。あの沸き立つような気持ち、あのすばらしいバイブレーションを感じて、火曜日まで生きながらえることができる。

もしあなたがまだクジラを見たことがないなら、そろそろ、この男、少し頭がおかしいのでは、
と思いはじめておいでかもしれない。もし一七年前、私が初めてクジラと間近に出会う前に、こ
の文章を読んでいたら、私だつてきつとそう思ったことだろう。でも、この本をお読みになれば、
みなさんの考え方も変わるはずだ。そうであることを願いたい。それまでのあいだは、すでにク
ジラを見たことのある人に訊いていただきたい。彼らなら、私のいいたいことを正確に知ってい
るだろう。いまこの瞬間までみなさんは気づいていなかったかもしれないが、この世には「クジ
ラ・ジャンキー」が満ちている。何ということのない毎日を生きのびるだけのために、頻繁にク
ジラを見にゆかねばいられない人であふれている。だから、たとえ私の頭がおかしいとしても、
同じように頭のおかしい人はゴマンといる。私はけつしてひとりぼっちではないのだ。

平均すれば毎日一万五〇〇〇人近くの人々がクジラを見たくて海上に繰り出している。しかし、
それがごく新しい現象であることに違いはない。観光ホエール・ウォッチングが商売としてはじ
まったのは一九五〇年代半ば、人々が南カリフォルニア沿岸を回遊するコククジラに興味を持つ
ようになったところのことだった。とはいふものの、優雅な巨人がほんとうの意味で人々の関心を
引くようになるには、まだ何年もの歳月が必要だった。私がサンタモニカ近くでうねる太平洋の
波のあいだに、コククジラを初めて見た一九七八年当時、南カリフォルニアが提供するさまざまな
魅力にくらべて、ホエール・ウォッチングはまだ二流のお楽しみにすぎなかった。しかも、北
アメリカ以外では、クジラを見にゆくなど、きわめてまれなことだった。ところがいまや、ホエ
ール・ウォッチングは時代の脚光をともに浴び、バード・ウォッチングに匹敵する人気を博す
ると同時に、四〇カ国近くを巻き込んだ数百万ポンド産業として、急速に台頭しつつある。一九

九〇年代は、ホエール・ウォッチング・ラッシュとして、長く歴史に残るだろう。現に、一九九二年一年をとってみても、世界中のホエール・ウォッチング・チケットの売上高は五〇万ポンドを超えているし、これに宿泊費、飲食費、その他もろもろの費用を加えれば、業界はじつに二〇〇万ポンドを超える収入を産み出している。

もちろん、危険なのは、こうしたクジラ愛好者たちが死ぬほどクジラが好き、という点である。われわれは、ときとして、自分たちがクジラの世界の招かれざる客であること、自分たちが特別の恩寵によって彼らを見ることができるとを忘れがちになる。われわれは何も、神からクジラを見る権利を授けられているわけではない。だからこそ、できるだけ彼らに不愉快な思いをさせないようにする責任がある。ホエール・ウォッチングとは、目で見るだけでけっして手を触れない活動でなければならず、ちゃんとした尊敬の念とエチケットが何よりも大切にされなければならない活動である。

さらに、われわれ人間には、客としての責任があると同時に、ホエール・ウォッチング・ラッシュからクジラの幸せを守る責任がある。クジラはお金に手ならぬひれを触れることができない。彼らにサラリーを払うことなどできないのだ。われわれには、彼らを鉚や流し網から守ってやると請け合うことはできないし、二度と再び彼らのふるさとである海をよごしたり、彼らから魚を横取りしたりしないと約束することもできない。ただし、ホエール・ウォッチングで手にする収入の一部を海洋研究や保護プロジェクトに役立てる、と約束することはできるだろう。ホエール・ウォッチング用の船を研究のために使うこともできるはずだ。死んだクジラについてはさまざまな研究がなされてきたが、生きたクジラについての研究は驚くほど進んでいないのが現状な

のだ。現代のテクノロジーは人間を月に連れてゆくことに成功した。しかし、われわれ自身の惑星に住むこのすばらしい知的生物についての理解は、まだはじまったばかりだ。

ホエール・ウォッチングによって、われわれはまた彼らを守るための公的な支援を引き出すこともできるはずだ。クジラ自身が海洋生物保護にとつてのすばらしい大使になる可能性を秘めている。彼らは人々の心の中に、海を守るために何か積極的なことをしなければという気持ちを植えつけると同時に、海洋・陸上自然保護区域確立を求める強力な政治的議論を巻き起こすきっかけにもなるだろう。ホエール・ウォッチングに同行を義務づけられているナチュラリストのはたすべき役割は大きい。何といつても、クジラに魅せられた観光客に充分な情報を提供する役割を担っているのだから。

もしあなたがすでにクジラ・ジャンキーなら、そしてザトウクジラ、コククジラ、ナガスクジラを始めとする大型のクジラを見たことがあるなら、このあとに続く物語がたくさんの幸せな思い出をよみがえらせてくれるだろう。

もしあなたがまだクジラと間近に出会ったことがないなら、この本が海に出て彼らと会ってみようという気持ちに火をつけるだろう。きっと落胆されることはないはずだ。

①

海底峡谷を

マッコウクジラの深海ダイビング ニューゼーランド

越えて

空港で爆弾騒ぎに巻き込まれ、肝の冷える思いをしたあげくに日付変更線を渡り、まるまる一日をかけてオークランドに着いた。そこから今度は国内線に乗り継いでウェリントンに向かい、フェリーでクック海峡を渡ること三時間、さらにハイヤーで一六〇キロを走って、ようやくカイコウラにたどり着いた。そのころには、さすがの私もぐったりと疲れはてていた。

しかし、よろよろと町に入ったとたんに、旅の緊張やストレスは、きれいさっぱり消えていった。カイコウラは、日暮れどきともなると人々がそれぞれの家の門口に繰り出し、そこに腰を下ろして南太平洋に消えゆく夕陽を見つめる、そんな町なのだ。時間がゆっくりと穏やかに過ぎてゆく。そしてそのなかで、人々は何かが起きるのをただひたすら待っている。むろん、何も起こ



りはしない。しかし、しばらくすると、そんなことはどうでもよくなってくる。カイコウラでは、人々は本来そうあるべきペースで人生を送っている。

ニュージーランド南島の、ウエリントンとクライストチャーチのほぼ中間に位置するこの町は、海と雪をいただく雄大な山並みにはさまれた、風光明媚な町である。そこはまた、ほんの目と鼻の先の沖合で互いに逆方向に流れる二つの海流がぶつかり合い、豊かな食物連鎖を繰り広げる場所でもある。北からの暖流が南からの寒流と出合い、ひとつになって海底の栄養分を巻き上げる。それが植物性プランクトンの養分となり、植物性プランクトンは動物性プランクトンの養分となる。そして、動物性プランクトンは魚、海鳥、アザラシ、クジラなどの餌となる。

初めてヨーロッパからやってきた移住者たちをこのカイコウラへと引きつけたのは、この海に棲むおびただしい数のクジラだった。町は一八四三年に設立された沿岸捕鯨基地から発展し、その後一九六〇年代まで、捕鯨が断続的に続けられていた。ニュージーランドの捕鯨船が最後に捕らえたのは、オスのマッコウクジラだった。一九六四年、カイコウラ沖合でのことである。

今日では、クジラたちは完全な保護を受けており、捕鯨ではなくホエール・ウォッチングが人々の関心を引きつけている。一九八八年に観光ホエール・ウォッチングがはじまってからというものの、カイコウラは世界中のホエール・ウォッチャーを魅きつけてやまない町になっているのだ。毎年クジラを見たくてやってくる観光客の数はおよそ三万、すでに（ホテル、レストラン、土産物店を含めて）五〇に近い新しい産業が生まれ、地域の雇用促進に寄与してきた。観光客の目当ては、文字どおり町から目と鼻の先に「定住」する、マッコウクジラたちの群れである。大型のクジラたちのなかでもおそらくはいちばんすばらしい、このマッコウクジラと岸辺からこれ

ほどかたんに出会える場所は、ほかにほとんどないだろう。

まる一日を過ごすという意味では、その日がカイコウラでの初日だった。私は全長六メートルの硬式ゴムボートのなかで、次第次第にグロッキーになりつつあった。舳^{へき}のリチャード・オリヴァー船長のかたわらに立つ私の足下には、衝撃を吸収するためのラバーフォーム・マットが敷いてあった。しかし、そんなものは何の役にも立ちはいない。船が三角波の頂点に乗り上げて、向こう側にすべり落ちるたびに、ケーブルの切れたエレベーターのなかに立っているような衝撃が伝わってくる。たったひとつ違うのは、担架で運び出されてそのまま数日間の休暇をいただくのではなく、もう一度エレベーターにぶち込まれ、つぎの衝撃に備えなければならないということである。それも、何度も何度も。出発してまだ一〇分足らず、にもかかわらず私は早くも全身打ち身とすり傷だらけになっていた。せいぜいできるのは、船べりにしがみつき、脚が、あるいはもっと悪くすれば、背中が、突然、本来曲がるはずのない方向に曲がるのを防ぐことだけだった。リチャードのほうは、そんな状況に慣れきっていた。なにしろ、彼はまもなく二〇〇〇回目のホエール・ウォッチングに乗り出そうとしていたのだから。一週間に七日、一日に四回、いまと同じ三時間の海上ツアーをこなす——それが彼の日常なのだ。だから、彼はもう人間が一生に負う数を超える打ち身を経験済みだった。現に、この年にも、すでに波にもまれて船のなかを転げまわり、胃袋を失うほどの経験をすませていた。いや、ほんとうに胃袋を失ったわけではない。そうなるのも不思議ではないほどの経験をした、ということだ。しかし、胃袋がすべって定位置をはずれ、医者にもとの位置に戻してもらわねばならなかったことだけはたしかだった。

舳で翻弄される私たちにくられば、同じ船に乗り合わせたほかの観光ウォッチャーたちは、ファーストクラスの待遇を受けていた。その数全部で二人。全員が鮮やかなオレンジ色の救命胴衣でしっかりと身を守り、私たちのうしろの快適な席におさまっている。彼らの席は最悪の乗り心地を体験するには、どうやら後部に寄りすぎているらしく、ある男性乗客によれば、回転する洗濯機のなかに坐っているような感じがするということだった。船が三角波に乗り上げるたびに、彼らは歓声と嬌声をあげ、私がキャピンの金属製の屋根に頭をぶつけるたびに、顔をしかめてみせるのだった。

カイコウラの南に位置するホエル・ウォッチング・ポイントに向けて、時速およそ五五キロで進む船のあとを、泡立つ白波が追いかけていた。目指すは海岸線から八〇〇メートル足らずのところ、長々と横たわり、水深一〇〇〇メートルから一五〇〇メートルに達する深海峡谷。その峡谷自体が、すでにして人を寄せつけない神秘の場所なのだ。私たちは、おそらく、その海峡よりも月の裏側のことをより多く知っているのではないだろうか。しかし、そこはマッコウクジラたちにとっては、まさに理想郷ともいえる場所なのだ。

マッコウクジラは、そうした海のはるかな深みで、大型の深海魚やイカを捕って暮らしている。彼らは大型クジラのなかでは唯一歯を持っている。しかも、その歯がとてつもなく巨大ときている。なにしろ一本が一キロを超えようかという重さなのだ。ひよっとしたら、そんな大きな歯を持つことで、歯のない仲間たちの分まで埋め合わせようという魂胆なのかもしれない（もつとも、そのマッコウクジラも、上顎には歯が生えていない。前に突き出した細い下顎に五〇本もの歯をぎっしり二列に並べるほうが得策、と判断したもののようなのだ）。